広島・草戸千軒町遺跡

1 所在地　広島県福山市草戸町

2 調査期間　第三八・三九次調査　一九八七年（昭62）四月～一九八八年三月

3 発掘機関　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

4 調査担当者　代表　松下正司

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　平安時代～江戸時代（中心は主に鎌倉・室町時代）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第三八・三九次調査区は、遺跡包蔵中洲の南寄りに位置し、東西約九〇m、南北五〇mの約四五〇〇m²である。この調査区では、主に鎌倉時代から室町時代前半の集落の様相が明らかになった。

第38・39次調査区位置図

鎌倉時代では、自然河道と考えられる溝5・6が東西方向に走っており、周辺に土壙群や、方形石積の壇を持つ墳墓・方形石積基壇等が設けられていた。

室町時代前半には、自然河道を利用した溝4と南北方向の溝10が合流しており、集落を大きく区画したものと考えられ、やがて溝3・9に掘り直されている。内部に東西柵が走り、多くの柱穴や土壙、また井戸や埋鍋遺構も設けられていた。なお溝3は、溝2、溝1の順序で掘り直されており、町割のための溝として室町時代後半まで存続している。木簡は溝2・4と土壙9から一点ずつ、また土壙10から削屑が四点出土した。

溝4は、自然河道と考えられる溝5・6と異なって、人為的に掘られたもので、長さ八五m以上、幅一一・五m、深さ一・四mである。以下溝3、溝2の順で掘り直されており、溝2は長さ六五m、幅二・五m、深さ〇・七mで、室町時代中頃のものである。なお溝2・4ともしがらみを設けて護岸施設としていた。

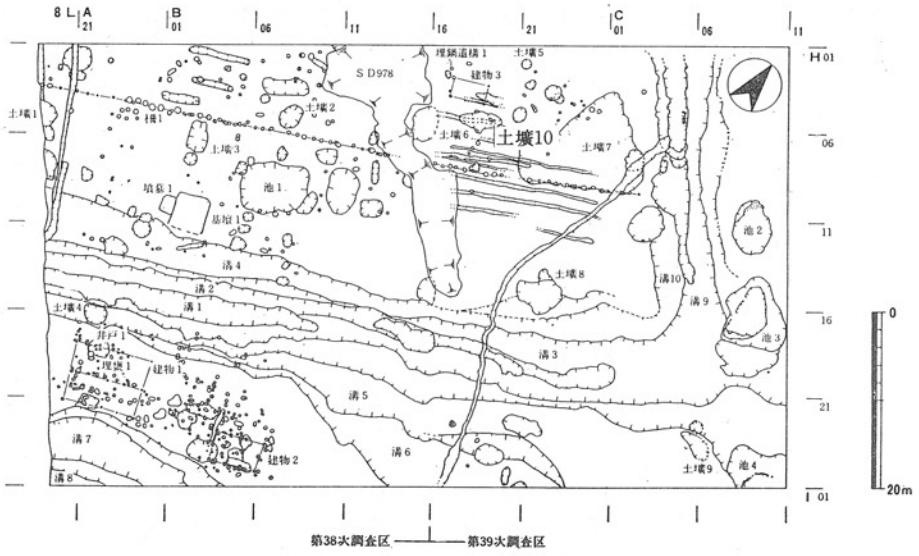
土壙9は東西一・五m、南北二m、深さ〇・五m、土壙10は東西一・五m、南北一・五m、深さ〇・六mで、共に多量の木片が廃棄されていた。土壙9は鎌倉時代、土壙10は室町時代前半のものである。

8 木簡の釈文・内容

(1)　「〈白米三斗□（花押）　(165)×24×3　112

土壙9から出土した(1)は、「白米」と花押については明確に判読出来るが、中間は墨痕が薄く、赤外線カメラで観察しても定かでない。墨痕を辿って検討した結果、「白米」の下は「三斗」の可能性が大きく、その下は「五合」とも読めるが、花押にともなう人名・職名の可能性もあるので留保したい。この木簡は、白米の何らかの移動にともなう付札で、花押を記した人物から発送されたものであろう。ただ移動の理由を示す記載はうかがえず、遠距離ではなく近距離間の移動が想定されよう。

鎌倉時代に花押を記した人物については、市場・港町と考えられる草戸千軒に多く存在したであろう商人・職人層の中でも一部の有力者か、国衙の役人・荘官・地頭・神官・僧侶等が想定される。またこの木簡が、白米の発送・中継を含めて如何なる時点で廃棄されたかが問題になる。この様なことから、この木簡は、草戸千軒の町の機能や居住者を検討していく際の好資料となるであろう。



第38・39次調査遺構略図

なお、溝2・4から出土した二点の木簡は断片で、内容は明らかにし難く、土壙10から出土した四点の削屑も判読できない。

9 関係文献

田邊英男・福井照道「草戸千軒町遺跡第38・39次調査略報」（『草戸千軒』№177、一九八八年）

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡―第三七・三八・三九次発掘調査概要―』（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報一九八七、一九八九年三月刊行予定）

（下津間康夫）

山口・延行（のぶゆき）条里遺跡

1 所在地　山口県下関市大字綾羅木・延行・有富ほか

2 調査期間　一九八五年（昭60）五月～一九八六年二月、一九八六年五月～一九八七年一月

3 発掘機関　下関市教育委員会

4 調査担当者　伊東照雄・佐々木　隆・水島稔夫・水島多津江・中野和浩・山嵜　薫・河野尚由・村田京子

5 遺跡の種類　水田跡・集落跡

6 遺跡の年代　旧石器時代、縄文時代、弥生時代～現代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（安岡・小倉）

延行条里遺跡は綾羅木川下流域の沖積低地に立地し、現在地表に展開する条里地割によって周知されていた。周囲の低平な台地面及び山麓傾斜面には、旧石器時代、縄文時代晩期から弥生時代、及び古墳時代から近世にいたる集落跡、墳墓などが稠